

第 182 回 江戸東京フォーラム「かつしかの建物と生活風景」

(要旨)



フォーラム風景



かつしか街ツアー見学会風景



同時開催特別展の一部

東京下町の葛飾を舞台に近・現代を物語る建物を取り上げ、建物から見た景観の特徴や暮らしの風景などを検討した。そして、東京下町という地域の特徴の一端を明らかにしていく。同会場で開催中だった特別展「葛飾探検団・かつしか街歩きアーカブス」の展示解説も楽しみながら学ぶことが出来る工夫が随所に見られ、この展示が葛飾の街歩きへの誘いにもなった。

司会の小林氏（東京都歴史文化財団）のもと、米山氏（東京江戸たてもの園）は、近代建築史を紐解き、葛飾の建築の位置づけを明らかにした。震災以降の東京の建築的特色として「看板建築」から「銭湯」は、手手者と生活風景を語るのに欠かせない要素と指摘。谷口氏（葛飾区郷土と天文の博物館）は、かつしかの盛り場の特徴として、盛り場独特の空間密度やにおい・音などの視点から再考し、消えゆく葛飾の風景が今そこにあるとした。工藤氏（葛飾探検団）は、葛飾の工場と開発についてもものづくりの建物とその風景を語った。再開発と昔ながらのたたずまいは表裏一体であり、今私たちが見ている葛飾の風景は、工場の転廃業の跡地であると指摘。大きな工場が姿を消すということは商店街や銭湯への影響があると同時に、町に音やにおいがなくなったのも技術改良によるところも大きいとした。最後に豊田氏（葛飾探検団）からは、映画館の栄枯盛衰を通して時代が失った者を認識させてくれた。

フォーラムに先立ち葛飾探検団による「かつしか街ツアー」（見学会）では 50 名程の参加があり、京成立石駅を起点に中川土手や古代東海道・立石仲見世など約 1 時間ほど巡った。